ガンダムビルド・ザ・デストロイヤー

すたーすくりーむ

【注意事項】
このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】
ただ、壊したかっただけなんだ。

目次

比類なき破壊者 ―― 1
より良い破壊の為に ―― 6
進化の果てに ―― 12

比類なき破壊者

◆　◆　◆　◆　◆　◆

ＧＰＤ、ＧＢＮどちらも人の創造物が壊れていく事に変わりは無い、結局の所持ち主が修理という形で直すかデータが再構築という形で直すか…正しい正しくないは置いておき、それぐらいの物なんじゃないかって時々思う事がある。

特に、今この瞬間みたいに…そう、相手を衝動が赴くままに壊していたら、そうもなって来る…のかなぁ。

◆　◆　◆　◆　◆　◆

【ゲームルール：フリーバトル、フィールド：市街地】

もう〝ガンプラ〟と呼べるのか？

作った本人でさえこのような疑問を持つ程に改造によって形を歪めた機体が今、対峙したザクの頭部を鷲掴みにして高層ビルに向かって投げ飛ばした。

既に銃撃や爆撃等様々な攻撃を受けて半壊していた高層ビルは、ザクが突っ込んだ事

で遂に限界を迎えて根本から崩れ、その大質量が仰向けのザク目掛けて勢いよく落ちてきた！

ペシャンコに潰されたザクのジェネレーターが何かの拍子で暴走し、更に高層ビルの破片が周囲に飛び散って他の建造物にザクの見方であろうドム、グフ等のモビルスーツを傷つけていく。その中で爆発の元凶たるその〝歪な機体〟が弾丸の如き破片を物ともせず敵に目掛けて突貫、右手にマウントされた３００ミリの大型ライフリング砲を撃ち放った。

砲弾が直撃したドムのコックピットが爆炎の華を見事に咲かせ、背部から自らを構成していたハズの装甲や内部機器の残骸を（弾薬内に込められていた大量のフレシェットと共に）吐き出す。そのすぐ後ろでもたついていたケンプファーはドムを突き抜けた残骸とフレシェットを諸に喰らい、吹っ飛ばされ、機体の全体が穴だらけに…当たり所も悪かったようでケンプファーは背面のビルに大激突した後、膝から崩れ落ちた。

その間に、ヒートサーベルと盾そしてフィンガーバルカンを構えて果敢に突撃してきたグフを巨大な鋏に変形した左腕で挟んで拘束する。

グフは何とかその拘束を振りほどこうと何度も鋏にヒートサーベルを突き立てようとするが余程堅牢に作られているのであろうその鋏はビクともしない。

何十回目かも分からない刺突を行うその直前…突如〝歪な機体〟の左腕の肘部から

バックブラストが吹き荒れ、その勢いを利用してか鋏は勢い良く閉じてグフを真っ二つにした…！

一瞬だけ宙を浮いた後、重力に再び従って路上に落下したグフの上半身。

〝歪な機体〟は足裏に仕込まれた鋼鉄のキャタピラをギャリギャリギャリと音を立てて回し始め、地に伏すグフ（上半身）に押し付ける。

３０ｍ級の巨体とキャタピラの動的破壊力が合わさり瞬く間にグフは削り出しの作業クズのような有様に成り果てた。

これで終わりではない、彼の敵はまだ居る。

遠方からザメルらしき機体が〝歪な機体〟目掛けて砲撃を行った。

ＡＰＦＳＤＳの細い弾頭が彼をギリギリ掠め、装甲板をほんの数センチほどかっ飛ばした。

直ぐに〝歪な機体〟は真横に飛び込み脚部を変形させて膝に搭載された車輪とキャタピラで道路のアスファルト舗装を砕きながら前進し始めた。

相手がうつ伏せで飛び込んだまま頭を上げず、相手を見失ったザメルはＴｙｐｅ３（散弾）弾頭を装填し、手あたり次第に弾をバラまいていた…が、的外れな場所を撃って

いる為か見事に飛び散った散弾の一発とも掠らない。
ザメルを操るダイバーが焦る中、彼の背後で大爆音が鳴り響いた…爆発物の物ではない、どちらかと言うとブースターの類に近かった。
咄嗟に振り向いた時には手遅れで、車輪とキャタピラを併せ持ったハーフトラックのようなガンタンク的機体が一直線に突っ込んで来たかと思えば高く跳び上がり人型に変形…あの先ほどまで暴れていた〝歪な機体〟となりザメルに組み付く！
ザメルは細く長い腕で取り付いた相手を引きはがそうとするも逆に〝歪な機体〟の剛腕にその爪楊枝にしか見えない腕を引きちぎられ、自らの主砲に生け花よろしく突き立てられてしまった。
さらにミサイルポッドも乱雑な裏拳によって取り除かれてしまい、いよいよ抵抗手段を何一つ残らない状態になった所で肘鉄の振り下ろしでグシャリとボディを拉げさせられ活動を停止した。

〝歪な機体〟は胸部のバスターアンカーを斉射し、ザメルの取り巻き達を次々に破壊…着弾の衝撃で装甲に大穴が空き、関節が千切れ飛び、カメラアイは割れて弾薬等は誘爆して更に被害を拡大させた。おまけにバスターアンカーと同じく胸部に装備された大型マシンキャノンと、右腕部の自動散弾砲及び左腕部の２連小口径陽電子砲の掃射を

開始…彼の正面には安全圏内等存在せず、只々暴力が吹き荒れた。
カウンタースナイプを試みたドルメルは即座に自動散弾砲とライフリング砲でズタズタにされた上で彼方までブッ飛ばされ、その巻き添えを喰らったブグはジェネレーターの誘爆を起こして爆炎と鉄くずを巻き散らし、背後のゲム・カモフを巻き込んだ。
バスターアンカーを一頻り撃ち切った所でその巨体に見合わない軽快な動きで生き残った連中に飛びつき、まるで鉈のような分厚いボウイナイフで手前のヅダのコックピットを串刺しにし、引き抜くとオイルや燃料等の液体や砕かれた内部機器や装甲が零れる臓物や血液のように飛び出し、その〝返り血〟で彼は染まった。
動かなくなったヅダを蹴飛ばして、今度は右手前でまごついていたザク・フリッパーを一撃で真っ二つにし、ザクタンクを蹴り砕いた後に被弾して運悪く全武装をはぎ取られてしまっていたライノサラスの背中に飛びつき、コックピットを一突きした後にじっくりと苦しめる様に顔を削ぎ取った。

――――彼は勝利した。
モニターが彼一人の勝利を告げると、彼は〝歪な機体〟の全身を思いっきり軋ませて鋼鉄（メタルハウリング）の咆哮を響かせた……！

より良い破壊の為に

ある日の彼は珍しく、黙々と作業をしていた。

荒々しく果て無き破壊と殺戮を日常とする彼とてＧＰＤ時代からのビルダー、自機の改善の為に地道な作業をするのも別段珍しい訳では無い。

しかし今日は何かと悩んでいた…理由は深刻なエネルギーリソースと積載量不足である。

長い事ガンプラバトルに身を投じ、幾多もの武装を作成してはその全てを例の〝歪な機体〟に盛りつけられるだけ盛り付けてきた。結果として機体は全長３０ｍをオーバーし、横幅も既存のＭＳの二倍程になってしまった…しかしそれでも尚増え続ける武装を扱うには積載量もエネルギーリソースも足りない、頼みの綱だったツインリアクター並列二個積みでさえこの有様なのだ。

脚を太くするという案は実際に作って試した所、彼が確保しておきたい運動能力の最低要求値を下回ってしまう結果だったためにお蔵入りとなってしまった。試作した脚部可変機構を取り除くという方法も大した結果を示さずとうとう詰みに嵌ってしまっ

た。

数十分ほど机に突っ伏したままの彼…だったが、何を思い立ったかノートパソコンに手を伸ばしＧＢＮ・ＧＰＤに関する総合掲示板を開いては適当に己の悩みと見合ったスレを探して一つの書き込みを投稿した。

『ちょっとエネルギーリソースと積載量で悩んでるんだけど皆どうしてる？

もうツインリアクターでも足りないんだけど』

このような内容である。

…無論、彼の様に過剰な積載を行う者などごく少数なので当然のように『ツインリアクターで足りないとかどんなの使ってんだよ』『パーフェクトストライクか？（煽り）』『機体に振り回されてない？』…このような結果が帰ってきた。彼自身、己の力量に見合った武装を積んでいるつもりであったのだが

中には支援型の機体を使っているのかと質問してくる者も居たが実際の所はそんな事は無く、どちらかと言えば汎用型と強襲型の中間のような機体なのでその事を機体の詳細と共に書き込むと彼らもまた『やっぱり可笑しい』『お前ランク幾つ？』と掌を返して来たのでやっぱり…と、彼は頭を抱えた。その後も何かと意見を送ってくれる者が居たのだがそれら全てが当の昔にやったことであったり方向性が違ったりと中々

失敗だったか…彼が諦め気味にＦ５キーを押した時、奇跡的な書き込みが現れた。
『話聞くなり昔の自分と同じような悩みに直面しててビックリや。
確かにその手の改造は扱える人間が居ないから難しいわな、取り合えず適当にアドバイス書いてくから参考になったら使ってくれ――――』
これ以降に綴られたのは、その人物のアドバイス…というよりは経験談に近い文章であったが、これこそ今の彼が求めていた情報だというピンポイントなアドバイスをこれでもかと書いてくれた。
因みにアドバイスした人物の（正確には使っていると言う機体の）特徴から掲示板の住人はある有名なダイバーであると推理したが本人が「ノーコメントで」と繰り返したので真相は闇の中だが彼にとってはどうでもいい事だった。

このアドバイスを基に改造を行った結果、どのような作品に至ったのだろうか？
その答えは今から５日後にある。

◆　◆　◆　◆　◆　◆　◆
◆　◆　◆　◆　◆　◆

【ゲームルール：フリーバトル、フィールド：ハードコアディメンションヴァルガ】

余りに思い通りのモノが出来上がってしまったので思わず彼は地獄の一丁目こと『ディメンションヴァルガ』に出向いてしまったようだ。このディメンション全体がフリーバトルエリアという何処ぞの世紀末連中をも顔を引きつらせる戦乱無法地帯で彼は暴れている。

――――1台の、腕の生えた砲塔を載せたハーフトラックがヴァルガの大地を爆走する。

側面に取り付けられた、短く切り詰めた９４式ベースジャンパーのブースターが重量級の車両とは思えない弾丸のようなスピードを生み出し、前面のスパイク付き耐衝撃バンパーで彼を妨害する全てを粉砕していく。

撥ねられた幾多の機体は先ず装甲は勿論砕け、衝撃で関節は千切れ飛びカメラアイはバリンッと割れた上で最後に強化されたタイヤとキャタピラに巻き込まれてズタズタの鉄くずになって大地に吐き出される。

そんな彼の前に立ちはだかったのは、壁の様に巨大な…関取にも見えるずんぐりとし

たボディが特徴のＭＳ【ガブル】だった。このガブルは本家とは違い両手が大型キャノンとなっているようでソレを彼の〝歪な機体〟目掛けて斉射した。

咄嗟に砲弾を避けた彼だったがバランスを崩しスピンした…かと思えば突如トラックの〝顔〟が割れてタイヤが装甲の中に収納され、それがやがて前脚となったかと思えば後部のキャタピラも荷台から離れて後脚となる。トラックの名残が残る長い顔を持ったその姿はまるで野犬だ。そして上半身に当たる砲塔もまた変形して砲が畳まれて人の顔が現れ、両腕もまたガンタンク的な武器搭載型からフレキシブルに変形して太く、そしてシャープな指を持った通常マニピュレータと化す。

野犬の下半身を持った３０ｍ越えの巨体はガブルすら見下ろし、かぎ爪を伴った厳つい左腕でガブルの片腕を掴むと今度は野犬の顔を使ってガブル本体に噛みついた。そのまま左腕を引っ張ると、堅牢に作られているハズのガブルの関節がミチミチと金属の拉げる音を立てて、少しづつ本体から剥離していく…そしてついにバチィインッ！と金切り音を轟かせて片腕は引きちぎられてしまった！

その引きちぎった砲塔兼右腕を彼はガブルのフィールドジェネレーターに何度も何度もメッタメタに叩きつけて、機能しなくなるまでボコボコに凹まし続けた。やがてパソコンの本体が落ちるような音を立てた後にフィールドジェネレーターは光を失い、そ

のタイミングを見計らって左腕を変形させて新兵器【フュージョンキャノン】を出現させる。

この大粒の光子魚雷を砲弾のように発射し、着弾した対象を対消滅によって破壊する超兵器の前に物理的な装甲は何の意味も持たず中身ごと大破…プレハブ住宅なら1軒ほど入りそうな大穴を開けられたガブルはその場に伏して爆散した。

余りにも良い機体の出来具合に彼は思わずニンマリとして、カメラアイを通じて機体全体を眺めた――――そして何処からか突然射出された極太ガンマレーザーの餌食となり丸ごと消滅した。

…あまりにも、非常に呆気ない最後だった。

だがこれがヴァルガの日常、気を取られている方が悪いのである。

この後普通にリスポーンして萎え萎えでログアウトした彼はしばらく泣いた。

進化の果てに

前回の一件で彼の〝歪な機体〟…名を【ウォーブレイク・Ξ（クスィー）】とするその機体は劇的な進化を遂げた。その姿は巨狼に跨る完全武装の兵士そのもの、下半身が四脚型となった事で強力な積載能力及びエネルギーリソースが実現し、より強力かつ数多くの武装を搭載するに至った…のだが、何かが足りない。いや…というより見落としている気がしてならない彼だった。

彼は今、一つ一つのパーツを入念に確認している…前回説明したフュージョンキャノンに、ナノラミネートアーマーやＰＳ装甲をも切断可能とする丸鋸型近接装備【デュアルソー】に、インパクトバイスを大型化かつ圧し潰すペンチ型から断ち切る鋏型に変更した【ハイインパクトシザー】、そして二脚型から引き継いだ戦車砲に３連装火炎放射器、小型のレールガンを計１８丁束ねた物量兵器【チェスト種子島レール東急東横線】とその換装用でビームライフルを使用したタイプの【チェスト種子島グリーンライン】、量肩部に搭載された大型パルスレーザー砲【レッドレクイエム】、それと手持ち武装のハルバードやブロードソードにヘビーマシンガンやショットガン等の銃火器、そしてその他の内蔵された武装や、各関節部に前腕の車輪と後脚のキャタピラにスラスターに至るま

でを確認した。
どれもこれも我ながら素晴らしいパーツ達だと彼はしみじみ自惚れていた。
…しかしこれでは完成系ではない、むしろ自分の理想から遠のいている気がする。そう感じた彼は今も自分のガンプラやその設計図…それと掲示板のアドバイスを何度も見直しているのだ。

――――そしてようやくこの機体の弱点に気が付いた。
なんて事はない、あんまりにも地上戦闘に重きを置きすぎたために宇宙適正がまったく無くなってしまっていたのだ。よくアドバイス集を見てみたら最後の方に「宇宙適正が全滅する」と書いてあった…自分で書き写したのにこの様である、余程素晴らしいアイディアに目が行ってしまったのだろう。
これまでの話で彼が宇宙にて戦闘を行ったシーンは無かったが、彼は地上戦と同じく宇宙戦も行う。
なのでこの状態は好ましいとはお世辞にも言えない。早急な問題解決が求められた…が、何をするべきなのかが全くと言っていい程見えてこない。

一先ず自分が今まで作った作品の中で、現存しており尚且つ宇宙適正のあるモノを

引っ張り出した。
…のだが、そのガンプラというのがこれまた酷いものだった。
大砲に翼を生やしたようなソレ。
こんな事言っても信じてもらえないだろうが実はこの機体、というか自走砲…といっても地上は歩けないし走れないので飛ぶしかない〝自翔砲〟は、あのダブルオーライザーを改造したものなのだ。確かによく見ればツインドライヴが搭載されているし何ならコーンスラスターがちゃんと翼に一つずつの計二つ付いている。
…いや言いたいことは分かる、一体何をどうしたらダブルオーライザーをこんなトンチキ兵器にできるのかと。彼曰く「ちっちゃいガデラーザを作りたかった」との事だが実際に出来たのはちっちゃいヨルムンガンドというか何というか…な機体であった。
さらに驚愕の事実があるのだが……このトンチキダブルオーライザー、なんと同じものがもう一つある。
彼は当時、同じものを二つ重ねればそれっぽくなるだろうと考えたそうだ。せめてメビウス・ゼロのようにはなるのだろうと…まあ結局トンチキ具合が増しただけで長い間タンスの奥深くに眠っていたのだが。
因みに大型ＧＮ兵器として見た場合、サイズに見合うだけのビームを吐き出せる上に機関部や銃身周りを変形させてダインスレイブ弾頭のように先端の営利な通称【ＧＮハ

イスピードロケット】を射出することが出来る。このロケットは装甲貫通能力に優れているだけでなく、砲自体が一種のムカデ砲のようになるので強烈な弾丸速度と射程距離を実現している。無論精度もお墨付きだ、オマケに三連砲塔である。

この時彼はある一つの蒙を拓き始めていた――何故地上でも宇宙でも足に頼る必要があるのか、破壊だけを求めるのにＡＭＢＡＣＫもクソもあるものか、そもそも何で俺は今まで大地に這いつくばっていたのだろう――と。

そう考えた時、その手には必要なパーツが揃っていた。

やるしかない…彼の心はそう言っていた。

◆◆◆　◆◆◆　◆◆◆　◆◆◆
◆◆◆　◆◆◆　◆◆◆　◆◆◆

さて、この結果は大体1か月後に実るものとなる。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

【ゲームルール：フォースバトル　フィールド：ムーア残骸】

――――え？何アレ？ガデラーザ？

そんな事を考えていたジムインターセプト（下半身ガンタンク）の頭上から数多の高速ＧＮロケットが降り注ぎ、圧縮されたＧＮ粒子の解放の勢いに巻き込まれた事で装甲及び内面が跡形もなく消し飛び、何故か残った履帯の欠片が空しく爆風で宙域内を流されていく。

スペースデブリの間をＧＮ粒子を巻き散らしながら自由自在に飛び、数多くの指…のように見える多段薬室式ＧＮロケット砲（最早その性質上ロケットというより榴弾であるが…）を小隊か分隊規模の相手フォースへ向けて鬼の様に巻き散らす様は恐ろしい以外に言葉などなかった。

結局、元ダブルオーライザーの大砲は翼はそのままに銃身を更に６倍の１８連装に分割してより面制圧に長けた仕様に改造したようだ…それを脚代わりに装着した事で某ハイスピードメカアクションゲームのフロート脚部の様な見た目と動きを手に入れた。まあ全体的な見た目は同ゲームの飛行型巨大兵器のようなのだが…。

…この時、ロケット砲の射角が届かないウォーブレイクΞの頭上から別のジムインターセプト（下半身ドダイ）が迫っていたのだが、脚部と肩部に近接防衛用に設けられたガトリング型機関砲（ヴェンジャー）のターレットの餌食となり、劣化ウラン弾で装甲が次々に穿たれやがてハチの巣のようになり、更に誘爆で下半身と大型ブースターを失い只のジムとなった所にウォーブレイクΞの巨大アームが伸び、その先端に装着されたＧＮ技術で切れ味が強化されたデュアルソーでバッサリと切断されて遂に本体丸ごとが誘爆して宇宙の塵となった。

フレキシブルな関節に繋がれた４機の機関砲は次なる目標に狙いを付けて再び斉射を始めた。

それと同時に味方のアイザック（レーダー機器ドカ盛）から次の攻撃目標を指示されたのでそちらに初速が秒速４００ｍを超えかねないような高速ミサイルを絶やさずぶちかまし、敵をスペースデブリごと砕きながら接近していく。

敵影を確認出来た所で、思い切って三つまで銃身を増やしたフュージョンキャノンをエネルギーリソースの限りぶちかまして相手の陣形を機体諸共ズタボロにした所で追いＧＮロケットを一斉射撃、更にターレットまでもを掃射させて、それだけでは飽き足らずバルカンに内蔵ビーム砲にバスターアンカーそして散弾砲それに薬室増加型戦車

砲あとそれとプラズマキャノン、ついでにチエスト種子島レール東急東横線とレッドレクイエムｅｔｃ．を有らん限り全て引き金を引いた。

ミサイルのようにすっ飛んで行くフォトントルピートが対消滅を起こして着弾対象を消し飛ばし、ＧＮ粒子を押し込めた榴弾が破裂してスペースデブリや敵機体等の区別なく木端微塵に吹っ飛ばし、劣化ウラン等の実弾による弾幕があらゆる物質を砕き、プラズマが相手の電子機器をジリジリと焼き切り、赤く真っ直ぐなパルスレーザーが何もかもを焼き切って通過していった。

ウォーブレイクの火力もそうだが、それ以前に彼らの属するフォースに戦術負けした相手フォースは既に防戦一方…というか防御の一切すら許されず、成す術なく倒されていく様は正しく戦争という形式を破壊し、虐殺という形を生み出したと言えるだろう。

ともあれ相手は流石にジムインターセプトだけでチーム構成を行うのは無理があったと悟ったに違いない。

というわけで最後の生き残りである相手のジムインターセプト（下半身ズゴック）が最後のあがきとウォーブレイク目掛けて突撃したのだが、それをとっくに察知していた彼は大きな隠し腕でインターセプトをガッシリ掴み、トランザムシステムを起動する。

――――ここで今のウォーブレイクについて解説するが、この機体には（真・疑似含めた）ＧＮドライヴだけでも３０以上が搭載されており、その内８つがツインドライヴである…が、何故過剰な機体負荷に耐えれているかと言うと、そもそもツインドライヴ同士が繋がっていない…というのも、この機体はエネルギーの接続だけで見たらそれぞれ独立した複数のパーツに分けられている。

エネルギー同士が干渉しなければ高負荷も発生しないというわけである。

…だがトランザムを使う場合は何故かエネルギー的な独立を解除し、エネルギーと共に負荷をも共有しなければならなくなってしまう。そうなるとウォーブレイクは３秒と持たずに自身の崩壊を引き起こしやがて大爆発を起こす。

…よって、この機体におけるトランザムとは自爆そのものである。

トランザムシステム特有の赤色にウォーブレイクが光ったかと思えば、次の一瞬にはまばゆい白色の光となってやがて爆炎となり、周囲のスペースデブリを自分諸共蒸発させるように一蹴…ついでにアームで掴んでいたインターセプトも秒で蒸発させてこの勝負の決着をつけた。

しかし爆炎は止まらない。

破壊の風がデブリを巻き込んで玉石混交の弾丸となってあちらこちらに散り、やがて味方までもを巻き込んでしまった。

まあ味方も味方で、彼がこんな事をするのは何時もの事なので「またこれだよ」と冷めきった様に流してそのままバトルエリアを退場した。